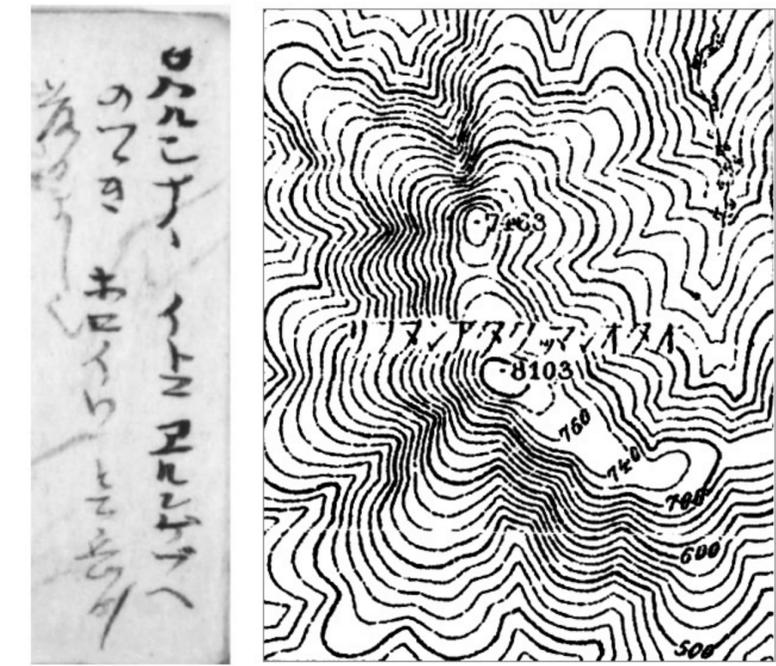
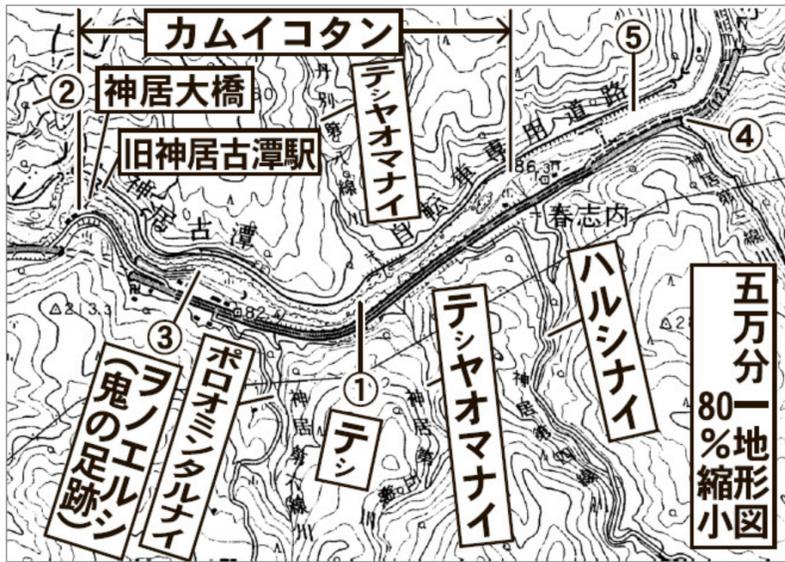


断章 旭川のアイヌ語 地名研究

73

高橋 基

掲載地図の「ハルシナイ」について、前回は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」に、案内のアイヌの人達から聞いた、「ハルシナイーハルは食物の事也。此処下るものも上るものも、此処え飯料置処なるが故に号る也」と、貴重な記録を残してくれたことを紹介した。すなわち、ハルシナイ(春志内川)から下流の石狩川は、カムイコタンと言われる激流のために、約三キロ下流のシキウシバまでは、丸木舟では下ることが出来ず、必ずここから荷物を背負い、シキウシバまで苦勞して歩くのであった(上る場合も同じ)。ハルシナイ(春志内川)は、そのような位置にある川だったので、「ハルシナイ(haru snay ↑ haru-us-navy 携帯用の食糧)弁当がいつも置いてある・川」が、本来の地名解だったのである。



(1)『第二番』 (2)『仮製五万分一図』

く知ってもらうために、ダイジエスト版ともいえる木版本の『石狩日誌』や『十勝日誌』を文久元年に刊行した。『石狩日誌』では、ハルシナイについては、次の記述のみで、ハルシナイの由来(地名解)には全く触れていない。

「過てハルシナイといふに出る。シキウシバより凡二十丁、此間をカモイコタンと云一此所にて少し遅流になりて、丸木船も五六艘備あり。故に是より又舟にて上る也」

また、前回紹介した永田地名解や知里地名解は、語意的には正しい解釈であったとしても、丸木舟時代のハルシナイ(春志内川)の由来ではなかったのであった。

さて、この由緒あるハルシナイ(春志内川)は、現在の公式河川名は、掲載地図のように「神居第四線川」と、実に味

旭川のカムイコタン③

気のない番号川になってしまったのである。石狩川左岸の伊野川と内大部川の間、六つの河川名が、神居第一線川から神居第六線川まで、番号川になってしまった。詳細は不明だが、昭和四十四年度から北海道の河川現況管理の機械化が、三年計画で実施され、その時に番号川化されてしまったようである(昭和四十五年発行、『北海道河川一覽』の序による)。

他方、不思議な縁もある。ハルシナイ(春志内川)から約一・五キロ旭川寄りの国道十二号線に、平成三年十月に「春志内トンネル」が完成する。由緒正しい「ハルシナイ(春志内川)」が番号川になってしまったが、「春志内トンネル」にハルシナイ(春志内川)の名を残すことになったのである。摩訶不思議な縁であるが、「春志内トンネル」については、

別項で詳述する。

最後にハルシナイ(春志内川)の水源について触れておきたい。写真(1)は、安政四年に松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)の『第二番』で、ハルシナイの水源は、「ハルシナイイトコ(水源)ーアルンゲブヘ(現・イルムケツプ山、八六四・三)のつぎ、ホロイワ(現・神居山、八〇九・八)と云岳より落るよし也」と書いている。

昭和三十五年、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」で、ハルシナイの水源を「ハルシナイカムイシリ(haru shnai-kamuishir 春志内の・神山)ー春志内川の水源にある山」として、これは、現在のカムイスキーリンクスのある神居山(七九九・二)を指している。山名も、神山ー神居山と合致している。

ところが、既に、当連載④で詳述したところであるが、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』では、現在のカムイスキーリンクスのある神居山は、写真(2)のように、山名が、オタオシマックタアンヌプリ(ota-osimak-ta-an-nupuri 川岸の砂原の後ろに・ある山)となっていて、幻の山名として紹介し、その謎解きをした。実際の水源地とは別にして、伝承者によって異なる山名が地図上に記載される一つの例である。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します